

線引き問題に対するラウダンの批判の再検討と新たな研究の可能性

佐々木 渉 (Wataru SASAKI)

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程 1 年

科学と疑似科学の違いを明らかにする取り組みは線引き問題と呼ばれ、かつては盛んに研究されたが、いくつか提案された有望な基準はどれも実際の科学活動と整合せず、次第に衰退していった。こうしたなかでラリー・ラウダンは、線引き問題は不毛で、疑似問題であると批判し、科学-疑似科学の区別を考えるのはやめるべきだと主張した。しかし、現実には、創造科学裁判など、疑似科学を取り巻く社会的な問題はたくさんあり、最近になって科学哲学のなかでも実際上の問題として線引き問題を考え直そうという動きが出てきている。そしてその際、ラウダンの線引き問題批判に批判を加える科学哲学者が多い。しかし、そうしたラウダンの線引き問題批判への批判のなかには、ラウダンの論点を捉え損なっているものも多いように思われる。例えば、ラウダンは科学-非科学になんらの差異も存在しないとのべているわけではなく、典型的な科学の例が、他と比べてとても優秀であることを認めているのである。ラウダンは、「科学的であるかどうか。」ではなく、「主張はいつ確かめられるか?」「いつ理論は良くテストされるか?」「なにを認識論的発展とするか?」というような問いを問うべきだと主張している。したがって、ラウダンの批判者はラウダンのようなアプローチではなぜうまくいかないのかを説明できなければいけない。

発表者は科学-疑似科学の区別を何らかの形で付けることに意義はあると考えているが、従来の線引き問題へ逆戻りすることは望ましくないと考えている。そのためには、かつて研究されていた線引き問題と比べて、新たにどのような問題が生じているのか。なにが解決を必要とされているのかを明らかにしなければならない。したがって、本発表では、従来の線引き問題の欠点を明確に指摘したラウダンの批判を改めて検討し、ラウダンの立場の限界と、線引き問題は今後どう考えられるべきなのかについて、最近の線引き問題研究を参照しながら、展望したい。